

## 美術の窓 (141)

## 葛飾北斎の娘、応為の作品

大和文華館館長 浅野秀剛

私は大阪のあべのハルカス美術館の館長も兼務しているが、そのあべのハルカスでの今年の目玉事業は、大英博物館と共同で企画した「北斎展」である。大英では、5月25日から8月13日まで「北斎一大波の彼方へ」と題して、あべのでは、10月6日から11月19日まで「北斎—富士を超えて—」と題して特別展を開催する。先日、待ちに待った大英博物館の展覧会がめでたく初日を迎えた。会場は、博物館中央に位置する巨大なグレート・コートの中真ん中に設けられた第35室。広くはないが最も目立つ展示室と言っても過言ではない。北斎の還暦から没するまでの30年間の絵画・下絵に焦点を当て、老年の北斎が、いかに魅力的な独自の作品を残したかを示そうとする趣旨の企画である。

老年の北斎の画業を考える時、どうしても考慮せざるを得ないのが、娘の応為の存在である。応為は、北斎の三女で、絵師の南沢等明に嫁した後、離縁して北斎の元に戻り、その画業を手伝うようになったと考えられている。生年は判然としないが、寛政12(1800)年頃と推定される。いつ北斎のもとに戻ったかも判然としないが、後述する英泉の随筆などによって、天保(1830~44)初めには同居していたと推定されるので、仮に天保元年とすれば、北斎が70歳から亡くなる90歳までの20年間も一緒に暮らしていたことになる。

長年、応為の研究をしてきた久保田一洋氏は、2年前に『北斎娘・応為栄女集』(藝華書院)を上梓し、そのなかで、応為の絵画(肉筆画)を8点挙げられた。それ以外には、版本の挿絵が2点、



図1 大英博物館「HOKUSAI」展 図録から複写



図2 大英博物館「HOKUSAI」展 図録から複写



図3 大英博物館「HOKUSAI」展 図録から複写

手紙が3点あり、それで全部である。応為は、同時代の人気絵師、浜倉英泉の「无名翁随筆」(天保4年<1833>成立)によって、北斎の家系のなかに「女子栄女 画を善す。父に随て今専画師をなす。名手なり。」と記される。「名手」と言われた応為が、20年も北斎と同居して作画したにしては、現存先品があまりにも少なすぎる。だから、北斎の作画を手伝っていたことは必定で、どのように手伝っていたか、もしかして、北斎落款の作品の一部は応為の手になるものではないか、などと、嫌でも考えなくてはならないものである。事実、残された絵画の多くは、単に北斎の亜流ではなく、個性的で魅力がある。久保田氏が選んだ8点は、精査された優れた見識だと思うので、それをもとに、私なりに応為の絵画を整理してみると、次のようになる。

1) 濃淡の連続したほかしによって、光の陰影を幻想的に表現した作品。明暗のうち、どちらかと言えば、「暗」の魅力を持つ静謐な画面が特徴的で、応為の作としては最も著名な「吉原格子先の図」(図1、太田記念美術館蔵)がその代表作である。「吉原格子先の図」は無款であるが、画中の三つの提

灯に「應」「為」「榮」とあるので、それが署名がわりと考えられる。全く無款であるが、同様の画趣を持つ「夜桜美人図」(メナード美術館蔵)も、ここに入る。2) 北斎様式の誇張された美人画であるが、輪郭線は均一でしなやか、色彩は豊かで随所にほかしを多用した作品。「三曲合奏図」(ボストン美術館蔵)、「蝶々二人美人図」(所蔵不明)、「肉筆浮世絵 第7巻北斎」(集英社、1977年)などに掲載)がそれに相当する。この2点は、応為が挿絵を担当した『女重宝記』(高井蘭山作、弘化4年<1847>刊)に最もよく似るので、応為としては基準となる作品といつてよい。

3) 北斎様式の武者絵であるが、過剰ともいえる色彩が氾濫する濃密な作品。線の質や陰影表現は、2)の2点と類似する。これに分類できる作品は「関羽割臂図」(図2、クレーブランド美術館蔵)しかないが、「三曲合奏図」の着衣の色彩感覚は「関羽割臂図」に通じるものがある。この作品は、池田東籬亭作、二代葛飾戴斗画、天保10年<1839>3月序の『絵本通俗三国志』5編8巻の挿絵に依拠して描いていると認められるので、制作されたのはその読本が刊行されてからということになる。「関羽割臂図」が特筆されるのは、「應為栄女筆」の署名の下に、仮に「葛しか」と呼んでいる白文方印が捺されていることである。この印は北斎のもので、現在、使用した年代が異なる3種類の印章が認定されているが、そのうち、第3番目に使用した印と同印と認められる。すなわち、

北斎が81歳から88歳まで(天保11年<1840>から弘化4年<1847>)使用した印である。応為はその当時、北斎と同居していたから、北斎の印を捺しても不自然ではないといえるが、問題はその意味するところであろう。ただの戯れと考えるか、北斎の指導の下に制作したことを暗に示していると考えかである。私は後者であると思う。人物の描き方や全体の構成が全くの北斎様式であるからである。ただ、線の質や、色彩感覚、ほかしの掛け方は北斎と異なる。

久保田氏は他に、「月下砧打ち美人図」(東京国立博物館蔵)、「百合図」(個人蔵)、「竹林の富士図」(個人蔵)を挙げているが、その作品の特徴については保留とさせていただきます。

さて、大英とあべの「北斎展」でも、「北斎の世界」の章で、応為の作品も展示させていただくこととなった。大英に展示されるのは「関羽割臂図」と「月下砧打ち美人図」、あべのではそれに加えて「吉原格子先の図」も展示される予定であるが、もう一つ、北斎館蔵の「菊図」(図3)2幅を「北斎か応為、あるいは二人の合作」として展示する。この「菊図」は、研究者間で甲論乙駁があるが、魅力的な作品ということではほぼ一致しているように思われる。署名は「八十八老人卍筆」および「齢八十八歳卍筆」であり、ともに「葛しか」印が捺されているが、署名は北斎のものとは認めがたく、印章も3種の基準印のどれとも合わない。したがって、元は無款の作品か、落款が落ち落とされている作品ということになる。展覧会の作品選定を主導した大英博物館のティモシー・クラーク氏と、それに協力した私は、この作品を北斎様式の作品であるが、線の質と色彩感覚は応為的であると考えたのである。

さて、展覧会をご覧になった方がどのような反応を示すか、楽しみでもあり怖くもある。

季刊 美のたより No.199

平成29年 6月 30日

発行 大和文華館